

「戦後75年、次代へのメッセージ」

河北新報「読者とともに 特別報道室」は2020年8月6～10日、戦後75年に関するアンケートを実施し、多くの皆さまから体験談や戦争に対する思いを頂戴しました。ありがとうございました。いただいたメッセージをご紹介します。（原則、原文まま）



■戦争のない世界作りに一人でも声を上げる事も、良いのではないのでしょうか。戦後の苦しみを経験した年寄り言葉です。
(仙台市青葉区・無職・男性・85歳)



■戦前のラジオや新聞では、敵撃滅、勝った勝ったと。子供心に米英撃滅、我慢しましょう勝つまでは…と。戦後は急激な食糧不足。大根や芋の雑炊は良い方で雑草までも産めや殖やせの国策で兄弟も八人。衣服は継ぎ接ぎだらけ、一日一度か二度の食事。国民に誰も責任はとらず。こんな地獄を孫子には味合わせたく無い。
(仙台市太白区・無職・男性・84歳)



■当時まだ満6歳で農家でもなかったの食べるものもなく親は大変苦労したと思います。多分途方に迷ったことと思います。お粥と言えばお湯をすするようなもので今も忘れることはありません。それに控え今の贅沢と言えばどうでしょう。民謡にもありますがお米一つも粗末にできません。しかし戦争は敗戦で良かったと思っています。
(白石市・無職・男性・81歳)



■宮城県北で農家をしていた父は応召し、沖縄で戦死しました。遺骨は戻らず、亡くなった場所も分かりません。母は帰還した人たちに父の最期を尋ねて歩きました。口の重い同僚からようやく聞き出せたのは、けがをした父が部隊から離脱し、手榴弾で自決したということでした。「生きて虜囚の辱めを受けず」という言葉が強い意味を持っていた時代です。郷里に妻と5人の子ども、父母を残して死んでいった父を思うと涙が止まりません。私にとっての終戦の日は8月15日と、沖縄戦が終結した6月23日。夏になると、まだ行き来もままならなかった沖縄に足を運んでいた亡き母の丸い背中を思い出します。

(仙台市宮城野区・無職・女性・79歳)



■開戦の年に生まれ終戦のとき4歳でした。B-29 が上空に現れると村役場の半鐘が鳴り響き「空襲警報発令」の合図が出されます。4歳の私は防空頭巾を被り母と一緒に裏山の防空壕に逃げ込みました。夜になると5キロ程離れた市街地にB-29から焼夷弾が花火のように落とされ街全体が赤く染まっていた状況を今も鮮明に覚えています。その時は戦争の悲惨さが良く理解出来ませんでした。終戦後町の人達が農家であった我が家に来て、芋や米や野菜を懇願して着物等と交換する姿見た時戦争は二度と有ってはいけないと子ども心に思いました。
(仙台市泉区・パート・男性・78歳)



■父親は太平洋戦争へ行き、マラリアになり帰ってきました。医療機関も今ほど進んでなかった時代…母はとても大変だったと思います。
(相馬市・主婦・女性・76歳)



■一党独裁、非民主主義と戦前の政治体制に戻ったかのような自民政権に危惧しております。二度と繰り返さない戦争。米国追従の安倍政権に危うさを感じます。 (仙台市青葉区昭和町・無職・男性・75歳)



■私がせいを授かり75年と2カ月になります。この間、5月に108才で亡くなった母がよく話をしておりましたが、父が出征してなくなりましたが、母が言うには父の死後に何度となく玄関口まで軍靴のおとがすると言うのです。ガチャガチャの音が聞こえ、帰ってきたと思えば外に出てみると空しく誰もいない。何度となく聞こえたそうです。死亡通知が届いていて、あり得ないと知っていてもそうなんだと思はざるを得ない事だったのかもしれない。とにかく、今のコロナもそうですが、肉親との死に目にも会わずに最後の別れが待ち受けるほど悲しいことはないとおもいます。私も母の死に目に会えない結果になりました。戦争はもう二度としない、させない強い心を持ちたいものだ。 (富谷市・無職・男性・75歳)



■親からは戦争の話聞いた記憶はない。軍隊の服務の名残か？何も語らず。終戦後の出来事では、10歳年上の従兄が防空壕にあった弾薬で遊んでいる内暴発し、右手の指4本と右目の失明の大怪我をしたこと。安倍自民党は70余年続いた日本国憲法(平和憲法と呼ぶ)の改悪をしきりに叫んでいる。変えなきゃならぬ理由が依然見当たらない改憲論には断固反対である。最後に、広島、長崎の原爆犠牲者に心から哀悼の意を捧げたい。 (不明・年金生活者・男性・74歳)



■①父はスマトラで捕虜になりました。私が高校の頃は高度経済成長期。戦争へのメディアの論調もそれと共に変わり「終戦記念日ではなく敗戦記念日」ではないか?!等父に聞いて見ました。その時どう思ったか?父の答えは「終わった、戦争が終わったと思った」との返事。殺しあいは、勝った国も負けた国も犠牲がともなう。戦争に「負けた」というより終わったというのが前線の兵士の素直な感情かと思います。学んだことは、机上論ではなく現場の実態がどうかという視点を常に忘れないようにする事です。②戦後の団塊の世代は少なからず、戦争体験者や関係者との接点が直接間接を問わずあります。その意味で、私達が最後の証言者になるのかも知れません。 (仙台市青葉区・無職・男性・70歳)



■戦争は反対です。平和の中でしか生きてゆけないから。昔の部族抗争と違い、今の戦争は誰の為に闘うのかわからない。今ミサイルが打ち込まれたら政治家は相手国に何が出来るのか? 個人発言で大臣を辞める根性無しや、揚げ足取りしか出来ない政治屋に何が出来る? 戦争責任(死刑等戦犯)を取れるのか 自衛隊はどうする? 戦闘機意外のその他大勢の隊員は? 何をやる? 国民はどうする? 通信網電気水他が破壊、パニックの中で反対集会開くのか全てが我が身安全確保に走るのみ。相手国は人工自然災害、AI ロボット、ウイルス散布など直接手を汚さず攻める! 世の中複雑に利害関係が絡まって一発解答はなく時間かけ、ひとつずつ妥協点探し求めるのみ!①我々はどんな状況でも生きてやるぞ(生きる覚悟)を持つこと②平和を言い続けていくこと③過激な政治家は排除すること。以上。 (石巻市・自営業・男性・70歳)



■戦争に勝ち負けはありません。戦争の被害者はいつも一般市民です。そして全てを失います。 (仙台市泉区・団体職員・男性・70歳)



■小学生の時、仙台七夕祭りに行くと、傷夷軍人を多く見かけました。戦後はまだ終わっていないと思いました。
(仙台市泉区・団体職員・男性・70歳)



■戦後生まれであっても、戦争の悲惨さはわかります。戦争は絶対反対！戦争経験者に是非聞きたいのは、生き残れた要因、例えば運がよかっただけで特別な努力無し、生き抜く決心を強く持ったから、命の恩人、家族、友人に助けられた、誰かの言葉、歌、絵、写真に救われた、将来を見据え希望があった、人を蹴飛ばしてきた、自分の性格を変えた、悪時も平気に出来た、歴史に学び生き抜くヒントがいっぱい頭の片隅にあれば、明日は我が身でも強気になれる！ボケてなんかいられない！
(石巻市・農業・男性・70歳)



■両親から満州開拓団の事について聞いてた事を書かせていただきます。父は満州開拓団第一期開拓団として昭和15年12月28日にK町を総勢14名で満州に渡りました。母は翌年の昭和16年19歳の時、叔父夫婦、伯母夫婦、実母と渡満。そこで縁があって父と結婚。満人を雇い、起動に乗っていた。昭和17年に実母は栄養失調で吉林省の収容所で死亡。庭に埋められたが、あまり痛みがなかったのも、掘り返し山林に何体も一緒に焼かれたといつも母は語っていた。その時の実母の光景がいつまでも消える事はなかった。そんな中、今度は父が脱穀機の風車が右目にあたり、大怪我をし鳴子病院に入院。父の年老いた祖父は父の怪我を見て男泣きをしたと父からきいた。1ヶ月間位入院し、右目は閉じる事はできなかったが、再度渡満。また、もくもくと満人と、共に働きそれなりの暮らしが出来た頃太平洋戦争が終結。それからは満人との待遇が逆転、全てのものが満人に取られ、母はリュックサックひとつを持ってトロッコ電車に乗ったり、歩いたりしながら、身ごもの身体で逃げ回り、なんとか長男を出産するも七ヶ月で牡丹江で死亡。泣く泣くまた、逃げ回り一年後に京都の舞鶴港から自宅に戻る事ができた。その間だ父はソ連の(ナホトカ)に3年間抑留、身体の弱い人達は次々となくなり、頑健な父は3年間抑留生活を送り昭和24年1月なんとか無事に家に戻る事ができた。ソ連では、ソ連軍に叩かれたり、夜も見張りがいておちおち寝てられなかったり、身体をはって頑張ったとはなしてくれた。また、オシッコをすると直ぐ凍ってしまったりと毒舌には、話せない抑留生活だった。家に戻れば二男夫婦が家を守っていたのでそこでも、簡単には家督を譲って貰えない状況であり、また、満州で成功して帰れる覚悟で皆満州に渡った。K町では271名満州に渡り、84名しか帰ってこれなかった。そんななか、国に補償金をと残った開拓団の人達が汗だくで戦ったが、一銭もいただかなかった。ただ宇野宗佑総理の時抑留生活の苦労分10万は頂いたが一銭も、これは私もなんの為に満州に渡り苦労したかわからずじまいである。なんと国が勧めた開拓団であったはずである。また、東北大学の農業科の生徒達も満州に渡り優秀な学生が命を落とした事も忘れてはならない。広島、長崎の原子爆弾での犠牲者も戦争があったため命を落とした。戦後75年私を含めて戦争を知らない子ども達等に何らかの形で風化しないよう語り伝えていける事を願っている。父は82歳、母は96歳、伯母は101歳まで長生きをしてくれた。若い時の苦労を忘れる事なく過ごした人生であったと思う。特に母は亡くなる数分前まで、実母の名前を呼んで亡くなった。
(大崎市・主婦・女性・70歳)



■一部の戦争崇拜者によって戦争は引き起こされた。今後争いは永遠に無い世の中になって欲しい！
(仙台市泉区・自営業・男性・69歳)



■「戦争は悲惨。ぜったいに繰り返してはダメだ」が戦後満州に抑留された父の言葉です。父は歩兵として

中国を転戦している中で敗戦を迎えたそうです。軍隊はトラックで逃げ出し足の悪い父は何とか乗り込んだそうです。その途中で引き揚げ地に必死で向かう赤ちゃんを抱えた母親達と出会い「兵隊さん!兵隊さん!子供だけでも助けて!」の聲が忘れられないと話していました。父たちはミルク缶(缶詰?)を母親に与えるのが精一杯だったそうです。父は少し酔うとそんな辛い記憶や満州抑留の体験を繰り返し話していました。そんな父は2014年に91歳で旅立ちました。私は無反省に戦争政策や当時の時代を美化するような政治の風潮をととても危惧しています。

(塩釜市・無職・男性・68歳)



■13年前に亡くなった私の父が70代前半の頃よく言っていたことなのですが、16才で出兵し青春時代を満州で過ごしたのもう一度満州に行ってみたくてよく言っていました。しかし仕事の関係で知り合った父と同年代の方で同じ満州に兵役で従事していた方にその話をしたらこのように言われました。「お父さんは満州で何も悪い事しなかったんだね。殆どの満州に行った兵隊さんは、もしもう一度満州に行って当事者に顔を覚えていられたら殺されるかも知れないから満州に行きたいとは思わないはずだよ。」と言われました。歴史では伝えられていない事実もたくさんあるのだろうと思いました。どこの国の政府も都合の悪い事は隠したりしますからね。現在も中国・韓国・北朝鮮から戦時中の賠償問題で互いの主張に食い違いがありますが現場にいた人の話を聞くと日本政府のコメントも鵜呑みにも出来ないところもあるかも?

(仙台市宮城野区・自営業・男性・68歳)



■実体験ではないが、一部の人間による暴走により、沖縄から東京大空襲、原爆と何時も弱者が犠牲になる。大量殺戮をしても個人の罪は問われない。戦争の被害者が訴えても変わらない。憎むべきは戦争。孫達に、恐ろしさを伝えて行きたい。

(仙台市青葉区・無職・男性・66歳)



■私の父は日本軍が玉砕したサイパンから生還しました。戦地では右肘を撃ち抜かれ、くの字に固まった状態、幼きころ自分たちとの違いに戸惑ったものでした。いわゆる傷痍軍人でした。父から聞いていた話を紹介しますと、父は捕虜となり、ハワイ、米国本土に連れて行かれたとのこと。サイパン島に上陸した米軍は、一人一人確かめながら息のある日本兵は担架に乗せて収容したそうです。怪我をした腕には一話があり、同行した日本軍医には切断しないとダメと言われたそうですが、米軍医には傷口に蛆がわいているうちは手当すれば大丈夫と言われ、腕は助かったとのことでした。その他、入っていた便所の近くに爆弾が落下、諸共吹き飛ばされ数時間失神状態になっていたこと、洞窟に逃げ込み米軍からの火炎放射攻撃を受けた際、たまたまあった濡れ麻袋を被り一命を拾ったこと等々、奇跡的に生き残った生々しい体験談を話していました。その中で父が強調していたのは、捕虜生活中、献身的に対応してくれた医療従事者の姿でした。「栄養失調で死にそうな奴が丸々太って戻ってくる。医者だって看護師だって兄弟、親戚が日本軍に殺されたかもしれないのに本当の博愛精神だ。でなければ生きて帰れなかったかもしれない」と。戦争は論外。息子、孫たちには、我々が生を授かったのは奇跡という話を伝えています。

(仙台市宮城野区・無職・男性・66歳)



■父は戦後シベリアに抑留されたと話していました。寒い他に食べ物が少なく体が小さくて食が細く他の人より飢えの感覚が少ないのでそれは良かったと言った記憶があります。子供だったので詳しい事を聞かないでしまい、又本人も多くを語らなかったので今にして思えば聞いておけば良かったと思います。

(仙台市宮城野区・主婦・女性・65歳)



■今や東アジアで侵略や核開発がなされて不安定な動きがある。日本は敗戦国として責任を負い経済発展と同時にアジア各国へ平和的に経済援助を進めてきた。戦争は家族、親しい友人等を失わせ生涯悲しみを背負わせるものである。今は戦争を知らない人達が増えているが、この事を心に刻んでほしい。2度と戦争を起こしてはならない!

(角田市・無職・男性・64歳)



■親父は亡くなったけど、子供の頃防空壕に入って凌いだと爆音が怖かったと、幸い田舎でしたから爆撃は免れたと、おふくろは満洲生まれ育ちあちらでは良い暮らししてたと言ったと数名の家政婦いたようですが、終戦を迎えて暮らしは逆転、何とか使用人に助けられ日本に帰って来たそうです、途中に弟亡くなり日本に帰ってから悲惨な生活、父親の実家私からは祖父の家に帰る大勢の家族で食べるのも苦労したと、戦争は2度と繰り返してはなりません、うまく話せないけど誰も戦争で命を失ってはなりません、今の私なら絶対に戦争に行かない、行く勇気すら有りません、亡くなられた方々に心から御冥福をお祈りします

(宮城県大衡村・アルバイト・男性・64歳)



■私が子供の頃、今は亡き母が言っていたことです。焼夷弾がパラパラ降って逃げ回ってたこと。釜石製鉄所目掛けて艦砲射撃が「ドカーン、ドカーン」とすごい音で住んでいる大船渡まで鳴り響いて怖かったと。祖父はシナ戦争?太平洋戦争の二回も行かされたと言っていました。祖母は母たち娘五人を大変な思いで育てました。戦争で亡くなった方は手厚い恩給がありましたが生き延びて帰って来た祖父は満足な仕事も無く、土方で日銭を貰っての貧乏な生活でした。祖父は心の病気になっていたと思います。土方の帰り焼酎のもっさり飲んで酔い潰れ布団に入って軍歌を歌って寝る。それが毎日毎日の事でした。私が小学生の頃だったので、それが凄くいやでした。戦争は人々を不幸にするだけです。

(仙台市泉区・主婦・女性・64歳)



■亡くなった母親から、戦争は絶対ダメと言われて育ちました。また、諸外国の状況を見るといまだ戦争状態の国もあるようです。早く、戦争のない世の中になる事を祈念しています。

(仙台市若林区・無職・男性・63歳)



■戦争に対する考えかた。人間(国)は何故、戦争をするのか? それは、一つでも自分の領地が欲しいから戦争したと思います。だが、現代は戦争しても、後悔だけ。大勢の人間が、命を落とし何も残らない。悲しみだけ残る、現代に生きる私くしの考えは、どこの国も戦争の無い平和な世界を作って欲しい。私の考え方が、ズレているかもしれないけど?

(気仙沼市・アルバイト・男性・63歳)



■実家の祖父は、終戦の翌年の5月になって、進駐軍の酔った米兵に銃で撃たれて亡くなったそうです。祖母は、お腹に6番目の赤ちゃんがいて、それは苦労して父達を育てたそうです。せっかく戦争に行かず永らえた命も、敗戦国故に裁判も出来ず、相手は帰国。仏壇にその時の新聞記事の切り抜きがありましたが、祖母は、決して多くを語ろうとはしませんでした。なぜ人のものを欲しがって愚かな人殺しを続けるのか、世界の子供達が反対を叫んで、それぞれの国の暮らしを尊重する世の中になってほしく思います。

(仙台市若林区・主婦・女性・62歳)



■戦争は、人間の一番の愚かな活動だと思います。どうして気づかないんでしょうね。

(登米市・アルバイト・男性・62歳)



■今年も、終戦記念日が近いてきました、どうして戦争が起きたのか、日本政府は、戦争をしないで降伏していたらどうだったのか、先般の戦争で亡くなった人数知れませんが、人の命は大切です、赤紙一つで、その人の命が決まることは、とても辛く、残念です。

(茨城県鉾田市・無職・男性・62歳)



■若者たちが国のために犠牲になり、さらには早く降参してれば避けられた原爆投下も全て国と軍。のせいで無意味な戦争が続き今でも後遺障害に悩んでる人がたくさんいる。戦争は国家が起こした、正義という名での殺人以外のなんでもない。

(仙台市太白区・アルバイト・男性・61歳)



■歴史を紐解けば、戦国時代等にも自国でも戦いをしていたのだから、気質的には、争い事が好きな人種なのかも知れませんね。それが、無謀とも言える世界大戦を引き起こしてしまった訳ですね。戦後75年が経った今、自分も含めた第二次世界大戦を知らない人々が多くなっています。とにかく言える事は、再び戦争を起こす事は、避けるべきだと思います。戦闘機や戦車は全て無くして、アメリカの言いなりになるのでは無く、自国の憲法を作って行って、スイスの様に中立国になり、未来永劫に平和が続くようにと祈るだけです。

(石巻市・無職・男性・60歳)



■あと20年もすれば戦争を経験した日本人はいなくなると思います。でも絶対に戦争をしてはいけない。そのためにも戦争の悲惨さは世界中の人達に伝えていく義務が日本人にはあると思います。

(仙台市青葉区・会社員・男性・58歳)



■身近な人から戦争の話はあまり聞いたことがありませんが、小さい時から何故か戦争の夢を見ます。何度か7月になると、市内の戦災復興記念館に足を運んだり 東京都新宿にある平和記念展示資料館、長崎平和公園に行ったりもしました！行く日が平日のせいでしょうか？いつも人はあまり居ません。どこも素晴らしい展示等があるのに、残念です。戦争は話でしか知りませんが、恐ろしい事があった事を年月と共に忘れられていくのに、それこそが悲しい事です。あの戦争の、苦しみ、悲しみ、平和の尊さを これからの若い人達にもっと理解して、忘れないで欲しいと思います。

(仙台市若林区・パート・女性・57歳)



■祖父母は亡くなり身近な経験者は、82の父だけになりました。子供の頃は家族から度々話を聴かせられたものです。現在は、あまり話題になりません。たぶん話しても昔の事として興味を示す人が減っているように思えてなりません。忘れてならないですが残念です。因みに私は、身近な人の話を聴くより本を読んで当時を想像させられています。20代の息子夫婦や娘に話してみても軽くスルーされ哀しいことです。風化してしまったような気がしてなりません。

(石巻市・無職・女性・57歳)



■子供の頃、駅の通路などに手足を失った傷痕軍人の方々を多く見かけ、戦争を身近に感じました。戦争は怖いと、視覚的にも感じる事ができました。

(茨城県東海村・公務員・男性・57歳)



■戦争は不幸をもたらす。戦争では何も解決しません。

(仙台市泉区・自営業・男性・56歳)



■私の両親は終戦当時小学生低学年で、戦争体験はありません、祖父が召集され船に乗り込んだ時に終戦となり、親戚にも軍人はいませんでした。しかし、高校の先生に特攻隊の生き残りがいて、今になって詳しく話を聞けばよかったと後悔しています。私は高校卒業後、すぐに自衛隊に入隊し、2年前に定年退職しました、戦争はしてはならず、そのために自衛隊があると思っています、国が存続し、国民を守るために自衛隊がある、我々は日本人であることを忘れてはならないと思います。

(多賀城市・会社員・男性・56歳)



■祖父が戦死した事、生前の祖母に聞かされました。サイレンや空の灯り爆弾を落とされた後の風景…全く違うかも知れませんが、東日本大震災後の南三陸町の風景が、戦後の風景みたいと見た事も無いのに不謹慎ながら勝手に浮かびました。言葉も出ない絶望感が襲いかかり涙も出ませんでした。戦争は資料等でしか勿論わかりません。でも震災後のあの風景にそっくり…心が痛みます。二度と起きてはいけない事です!!

(登米市・団体職員・女性・53歳)



■理想は、世界で核保有を無くすことが一番大切だと思います。ただし 隣国に、核を保有するなどと言っても、現実無理な話しです。核を持っている国は、核を、持っていない国に、攻撃するでしょう。核を、持っている国に攻撃すれば、自らの国も、自滅することが解っているから。なので日本も、使わない!核を保有し、抑止力として持っていたほうが良いと思います。遺憾砲!!では、日本国民を守れません。私の祖父 祖母や戦争を経験され苦勞をした方々は、核なんてとんでもないと、思われると思いますが、隣国は、話しが通じ無いので。

(宮城県大河原町・会社員・男性・52歳)



■大阪出身です。祖母から空襲の話の繰り返し聞きました。義母とよちよち歩きだった私の母の手を引き、生まれたばかりの母の妹を背負って焼夷弾が落ちる中を必死で逃げたこと。沢山の人が避難する川に架かる橋の下に逃げ込もうとしたら火の粉が降り注ぎ、胸元などにジュツと音を立てたこと。食べる物が無く、田舎の農家に着物を持って行き米などに換えて貰おうとしたら、少ししか分けて貰えずいい着物を沢山取られてしまったこと。その時の情景が思い浮かぶ様な祖母の話聞いて、子供ながらに戦争の恐ろしさや酷さを感じました。

(仙台市青葉区・主婦・女性・52歳)



■戦争の時代も大変だったけど、コロナの影響も大変な時代になりました。

(仙台市太白区・会社員・男性・51歳)



■わたしの亡き母は戦時中は今の平壤に疎開していました。今は報道がほとんどありませんが、中国残留孤児のニュースが流れると、母もそして祖父母もいつも涙を流していました。日本に帰る船に乗る直前まで家族がバラバラになる事を覚悟していた状況だったそうです。戦争を知らない世代ですが、毎回涙を流す親を見て育った私として、やはり戦争の悲しさは記憶に留めたいものです。

(仙台市泉区・会社員・男性・51歳)



■子供の頃一緒に住んでいた祖父母の戦争体験の話を良く聞きました。祖父は色々な国へ渡り戦った事、上官の命令で武器を敵に向けた事、東京生まれ東京育ちの祖母が田舎へ疎開して苦勞した事など、終戦記念日には必ずその時家にいる家族で黙禱しその日とは別に戦地から帰った日を祖父は終戦記念日と同じくらい大事にしていました。あたしは小さい頃から戦争の悲惨さ愚かさを身近に感じ世界の紛争、戦争がなくなればいいと思いつけてます。

(仙台市青葉区・パート・女性・51歳)



■学生の頃は歴史が苦手で、成績も悪く、戦争について無知でした。社会人になり、戦争に関する様々な情報をインプットする事で、興味をもちはじめました。8歳の長女に戦争について質問されると、分かりやすく説明するように努めています。先日、長女が戦争についてもっと知りたいというので、戦災復興資料館に行く予定です。義務教育では本当の戦争は知ることができません。自身のようにならないよう、興味をそそる説明を心がけ、更なる教養を身につけようと思います。

(仙台市若林区・会社員・男性・50歳)



■毎年、8月15日になると今日は終戦の日だと私達に教えながら神棚に手をあわせていた父でした。攻撃にはいかなかったものの、訓練をうけ出撃の直前で終戦を迎えたこと、亡くなったと思っていた息子が終戦後しばらくしてから帰ってきた時の父の母の驚愕と嬉しさの様子を、晩年、戦争体験として学校の宿題で尋ねた私の子どもに話をしていました。初めてきく内容でした。その時に、戦争は絶対に絶対にダメなこと。さらに自分が生きて行く時は家族があって隣人があって国があること。みんな守ってくれる人達がいる事を忘れない事。大変大変厳しい父でしたか、筋の通った、周りに対して思いやりがあり困ったら人肌ぬぐような真のある父でした。今思うと、私が生まれた頃はまだ終戦から20数年…。カラーTVや洗濯機、幼稚園の頃には関東圏に住んでいたこともあり、デパート、電車…戦争のダメージを感じては成長してきませんでした。必死に頑張った戦後復興を遂げてきた先人達のエネルギーやご苦勞があったらう事をこの歳になって、感じる事が多々あります。今は亡き父にかわり、終戦を迎えた日に戦後復興をになってきた先人達に感謝の手を静かにあわせたいと思っています。

(富谷市・パート・女性・50歳)



■近隣には物騒な国がたくさんある。防衛体制はもちろん、それに伴う法整備も必要。国家防衛というテーマに国民が向き合う世論づくりや土壌が必要ではないか。ダメだ、ダメだと反対するだけではダメ。平和を唱えていけば平和になるというわけではない。

(富山県高岡市・会社員・男性・49歳)



■祖父が満州から引き上げて来る際に子どもを連れて来る事が出来ず、満州に置いて来た事、日本に帰る途中で奥さんが亡くなった事、日本へ戻ってから戦死した兄の奥さん(私の祖母)と再婚した事をのちに母から聞かされ衝撃を受けました。我が子を残して来なければならなかった祖父たちの気持ちを思うと胸がギュッと締めつけられます。こんな悲しい事があっていいはずはありません。二度と繰り返してはいけないと強く思います。

(登米市・パート・女性・49歳)



■竹島や尖閣諸島、北方領土など外交上の問題が山積しているのに、戦争反対と唱えるだけでは何も変わらない。国家防衛というテーマについて、真面目に議論するときではないか。無論、戦争をしないために。だが、今はそういう議論すら許されない空気がマスコミや野党に蔓延している。嘆かわしいことだ。

(富山県高岡市・会社員・男性・49歳)



■戦争を知らない、知らない人ばかりの世の中がもうすぐ来ることが、何となく怖いと思っているのは私だけでしょか。今コロナで、私たち人類が試されているように思います。その前は、日本で言えば東日本大震災、原発再稼働。原発の周囲何百キロは危ない、けど危なくないように何十にも安全対策してるから大丈夫です。何十にも対策しないとダメなのは本当の安全ではないのでは。安全と言うのは何もしなくても、人間に害が及ばないこと、もっと言えば地球に害がないことでしょうか。今の若い世代、子供達には計算より大切なこと、伝えなければならないこと、沢山あるように思います。お金と人間の命、どちらが大切か、皆の命、地球を守る。そろそろはっきりさせて、方向を間違えないように舵をとるべき時ではないか、と思うのですが。

(名取市・主婦・女性・48歳)



■戦争は絶対にしてはならない。悲劇しか生まない。子供の頃から折々に沢山のドキュメンタリーや体験談、文献などを見聞きし、筆舌しがたい恐ろしさ、理不尽さ、悲惨さを心にとどめてきた。唯一無二の地球上に住む同じ人間なのだから、平和のために戦うという矛盾した行為をやめ、お互いを認め合い、譲り合う世の中でありたい。

(仙台市青葉区・主婦・女性・48歳)



■昔まだ子供だった頃この時期に必ず放送された【火垂るの墓】缶に入ったドロップを見る度に切なくなった記憶が有ります。なんの為に戦ったのか？お国の為とは？未だに理解が出来てません。そしてその為に犠牲になった命と終戦を迎えても尚かつシベリア抑留され人としての尊厳すら無い生活を強いられた捕虜となった人々。運で明暗を分けウチの祖父は捕虜にもならず帰って来たと生前話していました。あの船に乗れなかったらと考えるとゾッとすると。祖父が生きて帰らなければ…。孫の私やその子供達は生まれて居ません(当たり前ですが)戦争とは、未来へ希望を持たない後退する行為。9年前の福島原発放射能汚染でも痛感していますが、電気の供給に核使用でこんな脅威なのです。それが戦争で使われたら？絶対に有ってはならない戦争。軽々しく言葉にしては行けないとすら思う私があります。

(登米市・会社員・女性・47歳)



■私の会社では毎年8月15日は政府が行う戦没者追悼式の黙祷の時間に合わせ黙祷を捧げています。私の世代はまだ祖父母が戦争経験者のため、その意味を知っていますが、ここ数年平成生まれの方々はどうのような思いで黙祷しているのか？と複雑に思います。私の故郷は城下町であったため空襲を逃れたそうです。ただ、戦後の生活が大変であったという話を祖父母から聞いてます。祖母は何でも砂糖をかけます。蒸したじゃがいも。トマト。なぜかけるの？と聞くと、砂糖は戦後大変貴重な調味料だったのだよ。という回答に不思議な思いをしたのを思い出します。他に祖父は認知症を患っていましたが。私と遊んでいるとき、よく敬礼をしてみせました。幼少期の私には何なのかよくわかりませんが今は祖父の体に染み付いていた行動なのかもと思います。息子も太平洋戦争とは社会の教科書の中の出来事としてとらえているのみ。実際学校教育では戦争について中々彼等に教えるのは困難だと思います。教える側も確かな知識がないからです。戦争を題材にした映画が最近よく作られています。どれも決してカッコいいとか、素晴らしいなど美化していない。別角度から捉えている内容が多く、息子は好んでよく見ます。アルキメデスの大戦は数学者が不本意ながら戦艦大和を作成するきっかけを作ってしまった話。このような映画が息子世代には伝わるのかも知れません。伝え方、伝わり方が様々な時代なのでしょう。

(仙台市宮城野区・無職・女性・47歳)



■私はアメリカと日本のハーフなので日本人である祖父の戦争時代の話、アメリカ人である父がカメラマンとして戦場に出向いていた時の話を聞きました。祖父の戦争の話は、非常に大変な時代だったということ、天皇陛下は神様の存在だったというようなことでした。よく聞く話ですので今回はアメリカ人の父からの話を書きます。父が戦地に出向き役割を終え帰国して何年か経過し、アメリカの国の中でも戦争賛成、戦争反対の意見が分かれているのだと思いますが、ホームパーティーでお酒が入ると、戦地に出向いた人に集中攻撃をする人がいたようで父は何度も嫌な思いをしたようです。殺し、弱いものいじめ、野蛮だなど酔っているからだとは思いますがそのようなことを言われ悲しい思いをしたようだということを父の奥さんから聞きました。父も好きで戦地に出向いた訳ではなく、その時の役割として出向いたのだと思います。戦争は、いろいろな方向で人を深く傷つけるのだなと思いました。戦争なんて、絶対にあってはならないと思う。

(富谷市・会社員・女性・47歳)



■私の祖母は関東大震災を経験し、その後、日清、日露戦争、第一次、第二次世界大戦も経験した明治生まれの人でした。その人生はほとんど戦争の記憶だったと思います。87歳で亡くなりましたが、認知症となつてからは、自衛隊のヘリコプターが家の上を通る度に『空襲だ、空襲だ、逃げろ!逃げろ!』と大きな声で叫ぶのです。絶対に二度と消えることがない戦争の記憶。ヘリコプターの飛ぶ音を聞くたびに祖母のことを思い出すのです。

(仙台市宮城野区・アルバイト・女性・46歳)



■私と主人で亡くなった祖父のお見舞いに行った時でした。祖父が病室の窓の外を眺めながら話を始めました。「ちょうど、あの山ぐらいだな。大砲をドーン、ドーンと打ってな。まず、話しになんねのや。」なんの話かわからなかったのですが、聞いているうちに戦争の話だとわかりました。祖父は誰が聞いても戦争の話は思い出したくない、と、ほとんど話してくれないのを知っていたので驚きました。祖父は川崎町の農家の長男でしたが、旧満州に2度召集されたそうです。歩兵の最前列で大砲を打ち、最初に敵陣を攻撃して進軍させる役目でした。大砲に着くのは農家出身者が多いこと、捨て駒であること、敵軍と大砲の打ち合いをするが殆ど当たらない事、大きな怪我ではなくかすり傷で病気になり死んでいく事、自分は背が低かったので怪我せず生き残れた事、自分より背の高い者から先にケガで亡くなり、部隊の殆どは亡くなった事を話してくれました。祖父は懐かしむように「まず、話しになんねのや。」と、何度も言い、和やかに微笑みながら話してくれました。私は祖父の体験した理不尽さ、壮絶さと、祖父の表情のギャップに涙が止まりませんでした。何年も兵隊でいた間の僅かな話でしたが、青春の一番多感な時期を兵隊として過ごしていた事に、胸が詰まります。祖父が生きていたから私がいると強く感じました。祖父はその後、戦争の話をする事はなく、数年後に亡くなりました。決して繰り返してはいけない歴史だと思います。

(仙台市若林区・自営業・女性・46歳)



■【戦争の思い出を語らせた教室で、先生も児童もバカ笑いなのにショック】ある年の夏、小学校で先生が「皆さんのおじいさんやおばあさんの戦争体験を紹介してください」というお題で児童に語らせた。ある児童が言った。「僕のおじいさんは戦争で沖縄に行きました。アメリカ軍が攻めてきて、隣の人が突撃!と言いながら立ち上がった途端に機関銃で殺されました。」と語ったら、私を除く全員が大爆笑。先生も大爆笑。何が面白いのか、それは戦争でヒドイ話じゃないのか。人が死んで爆笑するとは何事か。小学校6年生でそんな分別もつかないのか、注意すべき教師まで腹抱えて笑ってるんじゃ始末に負えない。ただ1人笑わず茫然と辺りを見渡していた12歳の僕は、「この国は終わってる」と絶望した。そして彼らと僕とで何が違うのだろうと思

った。僕は子供の頃からミリタリーマニアで、戦記物も多数読んでいて戦争の悲劇は知っていたから、そこが違うのだろう。結局のところ、戦争の話でそれだけ爆笑できるという事は、「他人事」なのだ。それはそれで幸せな事なのだろうが、僕としてはそんな幸せの輪に加わるのはゴメンだと思い、もっとマシな人間でいられるよう、その後もミリタリーマニアである事を続けた。他人からはミリタリーマニアでいると好戦主義者や右翼と思われるがちだが、実際はその逆で、平和的思想や発想は軍事的知識がない限り絶対に真剣なものとならない。それを僕は12歳の時に小学校の教室で学んだ。

(仙台市太白区・自営業・男性・46歳)



■両親ともに戦後生まれて、話もきいていないので、よく分かりません。

(多賀城市・団体職員・男性・46歳)



■人の命を軽んずる無謀な作戦。特攻、玉砕。乗員保護の無視の零戦。民間人を盾にし、足手纏いとなれば殺した沖縄戦。美化せず事実は事実として周知する事が大切だと思う。日本人の特異な性質を知らなければ戦争を考える事は出来ないし、憲法9条を議論出来ない。

(仙台市太白区・自営業・男性・43歳)



■当時の満州へ出兵していた祖父は終戦後、日本に戻った後、家にあった全ての刀や武器を捨てたと言っていました。※実家は仙台藩の家格の高い家臣だったとの事で建て直し前の実家は武家屋敷のようでした。今はその面影もない一般家庭(笑) その時に祖母に話したのはもう、人を傷付ける武器はいらない、犠牲の上に成り立つ平和等は平和ではない、許し合う事で、認め合う事で得られるものこそが平和、たいらな世の中とは、人の心にあるもの、刃を持つ先に平穏な日々は存在しない、子達に和を解くに、大人達が争ってはいけない、と祖母に話したそうです。祖父は、戦時中の話を一切しませんでしたが、いつもにこにこ笑顔で、また何事にも動じない人でした。生き残って、日本に帰ってきた人を全てに物語があると思います。当時の様子や体験を誰にも話す事なく、祖父は旅立ちましたが、私はそれが祖父の平和への信念なのだと思います。

(多賀城市・会社員・女性・42歳)



■もう75年なんですね

(むつ市・無職・男性・41歳)



■戦争で祖国を護った英霊を讃え靖国神社に参拝しましょう

(仙台市宮城野区・会社員・男性・39歳)



■私は戦争が起こったときにまだ生まれていなかったため、戦争のことについてはテレビで見ただけや人に少し聞いたりしただけである。しかしそれでも今まで起こった戦争は人間同士が引き起こした愚かなものであり、罪のない人の命をたくさん奪った悲劇的なものであると考えた。今日において、世界ではたくさんの戦争になりうる出来事がたくさんある。これから、戦争を引き起こさないために、そして世界のあらゆる問題を解決していくためにも世界の一つ一つが協力していくべきでないかと考える。

(塩釜市・大学生・女性・20歳)



■もう二度とこういう事を起こさないで欲しい。

(一関市・専門学校生・男性・18歳)

■このような事を絶対に忘れてはいけない



(一関市・専門学校生・男性・18歳)

■戦争はどの世界でもなくなってほしい



(釜石市・高校生・男性・17歳)

■戦争はとても悲しいもの



(仙台市若林区・中学生以下・女性・12歳)